
エンドレス・レイン

ジャガランディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス・レイン

【Nコード】

N1833F

【作者名】

ジャガランディ

【あらすじ】

ずっとずっと…。止まない雨の中で夢を探していたんだ。

NO・1

「これでは2年生には上がれんな…。」

先生は渋い顔で赤色のアルファベットが並んだ成績表を僕の前に投げのように差し出した。

「もう1度1年生をやってもいいが、先生は諦めて違う道を探した方が良いと思うな。君にはやる気が無さすぎる。」

やる気か。やる気なんてある訳ない。

僕はこうなる事はアンタに言われなくても分かっていましたよ。と言わんばかりの涼しい顔で

「退学します。」と答えた。

学校の外に出るとすでに夜になっていた。ポツポツと降りかけてた雨が次第にどしゃ降りになり、街には何かに追われるように必死に走る人で溢れ何だかせかせかしていた。

僕は走り行く人達の邪魔にならないように歩道の隅っこをゆっくり歩きながら駐車場へと向かった。

駐車場へ着いてクルマに乗り込みエンジンを掛けるとなぜだか分からないけど無性に泣けてきた。

学校を退学になったから泣けたのか？いや違う。退学になったのは学校をサボってばかりだったからだ。最初からこうなる事は分かっていた。

友達と分かれるからか？友達なんて居やしない。

じゃあなぜ？何だか分からないけど涙が止まらない。悲しいという感情ではなく、不安や恐怖に似た気持ちだった。

しばらくクルマの中で茫然としていた。カーステレオから流れる軽快なロックがうるさく聴こえる。何も考えたくない。

1時間位経った時、ポケットの中のケータイがブルブル震え出した。

母からのメールだった。

『さつき学校から電話がありました。真面目に学校行ってるものと安心していたから母さんびっくりしたよ。とりあえず早く帰って来なさい。お父さんと一緒に話をしましよ。』

このメールを見た瞬間、また涙が溢れてきた。親に無理矢理行かされた学校だつていうのをずっと言い訳にできていたんだ。

申し訳ない気持ちと恥ずかしい気持ちで胸が締め付けられて息が苦しくなった。

それから30分後、ようやくサイドブレーキを解除した。ガソリンのメーターは真ん中より少し下を指していて、CDはとづくに全ての曲を演奏し終えていた。

人と車でぐちゃぐちゃになった名駅通りをすり抜け、国道22号線に乗った。

信号が赤だった事を交差点を渡りきってから気が付く程まだ頭の中は呆然としている。

降りしきる雨で視界もどんどん悪くなっていく。

「事故って死んでしまえばいいのに……。」
と心の中で呟いてみた。

NO. 2

クルマの中で何となくハロウインを聴きながら口ずさをでいた。その声はマイケル・スキスのオペラのような美しい声とは真逆の今にも死にそうなデスヴォイスであった。

名古屋から大垣までの40キロの道のりが今日はやけに近く感じた。どしゃ降りだった雨は一層激しくなり、スコールとなって不気味な夜だ。ヘッドライトに照らされた雨粒が針のように地面に突き刺さっている。

家に着いた時には22時を回っていた。

車庫にクルマを入れ、そと玄関のドアを開けて2階の自分の部屋へと泥棒のような足取りで向かった。

部屋に入るなり、バタンとベッドにうつ伏せに倒れこんだ。まだ頭ん中がボーっとする。

何気なくオーディオの電源を入れて再生してみると、たまたま入っていた銀杏BOYZが爆音で流れ始めた。

銀杏を2、3曲聴いたところで部屋のドアが開いた。母さんだ。

「おかえり……」

「ああ……」

「台所に夕飯があるから温めて食べなさい。それ食べたら話をしましょう。」

僕は台所に行ってすっかり冷めきったコロッケを食べた。いや、トンカツかな？どっちでもいいや。味が全くしない。

食べた気がしない夕食を済ませてリビングに行った。

母さんはソファに座って俯いている。父さんは寝転がってニュースを観ている。

僕は寝転がっている父さんの横にチョコンとあぐらをかいた。
「ごめん。」

かすれた声でとりあえずあやまってみた。

少し間をおいて母さんが口を開いた。

「学校、辞めてきたんだって？」

「うん…。」

「先生は何て言ってたの？」

「2年生に上がるのは無理やから留年か退学か選べって。」

「それで退学を選んだの？」

「うん…。」

父さんがテレビを消して起き上がってタバコに火を着けた。

「ま、やる気がねえなら留年したって無駄ってこったな。」

ため息まじりで父さんが言った。僕は黙り込んでしまった。

「んで、辞めたのはええけど、どうすんや？これから。」

「まだ…。分からん…。」

と答えると父さんは立ち上がって僕のパーカーのフードを掴んで言った。

「出ていけ。お前の面倒はもうみれん。」

僕は外に放り出され、玄関には鍵を掛けられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1833f/>

エンドレス・レイン

2010年10月16日20時46分発行